

社会学実践における価値判断の基準

——ピーター・シンガーの〈悪〉概念をもとに——

首都大学東京大学院博士後期課程 高橋直也

1. 本報告の目的

本報告の目的は、われわれ社会学者（あるいは運動家）が社会問題の解決を目指し、社会学実践を行う際の、価値判断の基準を考察することである。倫理学者ピーター・シンガーが何を〈悪〉と考えているのかを検討することで、それを行う。

2. 価値の相対性と価値判断の必要性

社会学の思考伝統においては、価値とは相対的なもので絶対的な価値などは存在しないとされる。複数の社会を考えると、そこで現れる価値体系は異なっているためだ。たとえばエミール・デュルケムは、価値の一つである道徳について考察した論考において、社会にはそれぞれふさわしい道徳がある、と考えた（デュルケム『社会学と哲学』）。ある社会において妥当とされる道徳的価値判断が、他の社会において妥当とされる必然性はない。

同時に、われわれ社会学者は、社会に生ずる諸問題を解決しようともしてきた。そこには当然、価値判断が含まれている。環境社会学の研究がわかりやすい。池田寛二によれば、環境社会学には、四つの争点に基づいて四つの正義論的な前提（背後仮説）が存在する（池田「環境社会学における正義論の基本問題」）。社会学は相対的にならざるを得ない価値判断を行うために、暗黙のうちに、ある種の正義論的な前提を導入していると考えられる。通常、このような前提は問われないことも多い。しかし、ひとたび問われてしまった場合、社会学は、自らが前提にしている正義論的な前提を告白し、それを正当化しなければならない。本報告はそのための一試論である。

3. 〈悪〉の基礎理論としてのピーター・シンガー

社会学実践を正当化する方法の一つは、ある状態は〈悪〉であるから除去すべきだと述べることであり、そのためには「何が〈悪〉であるのか」ということの基礎理論を示す必要がある。本報告ではその理論をシンガーの〈悪〉概念に見出す。

シンガーが考える〈悪〉とは、端的に言えば苦痛である。シンガーは周知のとおり功利主義者であるが、彼の原理は〈最大多数の最大幸福〉ではなく、〈利益に対する平等な配慮〉である。利害を持つものは、その程度に応じて平等に配慮されねばならない、ということである。功利主義と聞くと、〈トロッコ問題〉を思い出すかもしれないが、シンガーの議論はそのような究極の選択へとは進まない。シンガーは、何が〈悪〉なのかを示した上で、われわれの社会に見出される〈悪〉を一つ一つ指摘していく。そこで見出される〈悪〉とは、たとえば、狭いケージで飼われ、喧嘩防止のためにクチバシを切断された鶏や、狭い箱で拘束され下痢を繰り返す子豚などの惨状である。それらは直観的に〈悪〉だと感じられるようなものばかりである。シンガーは、それらがどうして悪いのかを理論的に説明する。もちろん、シンガーの議論には論争を呼ぶようなものも多い。しかし、《社会から苦痛を少しでも減らそうと努力すべきである》という、シンガーの根本的な主張に反対するのは難しい。この反論の難しさが教えるのは、われわれの価値判断の根本的な基準が、〈悪〉の有無であるということである。

[参考文献]

Durkheim, É., 1924, *Sociologie Et Philosophie*, Paris: Félix alcan. (=1985, 佐々木交賢訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣.)

池田寛二, 2005 「環境社会学における正義論の基本問題：環境正義の四類型」『環境社会学研究』(11), 5-21.

Singer, P., 1993, *Practical Ethics-Second Edition*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1999, 山内友三郎・塚崎智監訳『実践の倫理 [新版]』昭和堂.)